

岐阜市三輪山真長寺所蔵「十二天像」のうち「毘沙門天」想定白描画



真長寺本「毘沙門天」想定白描画 平成 20 年

真長寺本「毘沙門天」は、これまでに模写を行った「日天」「風天」「閻魔天」とそれに「月天」を含めた鎌倉時代の作例が失われており、類似本である西明寺本を下敷きにして白描画で想定復元を試みた。図像的には西明寺本と現存鎌倉時代真長寺本とは酷似しており、復元画も西明寺本「毘沙門天」とほぼ同図様とした。ただ微妙な筆致の差や、文様については差異が認められ、筆致については真長寺本でも甲冑着装の「風天」を参考にして変更しているが、文様は確定要素が見当たらない為、復元は見送っている。

1. 研究概要

鎌倉時代末ごろの制作とみられる「日天」「風天」の現状模写、「閻魔天」の復元模写が19年度に完成し、資料館に収蔵されている「月天」とあわせて鎌倉末原本の模写はすべて終了した。これらの資料および模写研究の成果を基に、今後は欠失している鎌倉時代十二天像の復元作業に移行する。

欠失尊像の復元は困難が予測されるため、図像資料の豊富な「毘沙門天」像をまずは白描で復元し、今後の復元作業の手掛かりとしたい。「月天」「日天」「風天」「閻魔天」以外の諸尊像については、真長寺が江戸時代以降の制作と見られる尊像を所有するものの、時代格差があり仏教図像としての比較が不可能である。真長寺本（鎌倉時代）のような立像形式での類似本は、滋賀県西明寺本と石川県正覚寺本（長谷川等伯筆）の2例が挙げられるが、正覚寺本は室町時代末の制作であり、鎌倉時代後期の制作とみられる西明寺本を基幹資料とする。西明寺本とその他毘沙門天図像の資料を収集、研究し、白描ではあるが精緻な図像復元を目標とする。

2. 真長寺本「毘沙門天」の状況

現存している真長寺本「毘沙門天」は江戸時代の作例と考えられ、鎌倉期に製作されたと考えられる「日天」「月天」「風天」「閻魔天」との画風の差異が激しい。ただ、これまでの研究により西明寺本の図像が酷似していることが分っており、また正覚院本も図様の一致が認められるため、これらの図像を参考に復元を検討する。



西明寺本「毘沙門天」



真長寺本のうち江戸時代作例 8 福

画風の差から、これらも2グループに分類した。おそらく上段の5副のグループの方が時代が上る。真長寺本現存「毘沙門天」は、上段グループの左端。

3. 作例の検証

類似本である西明寺本、正覚院本の一部図像を下敷きに、想定描画を試みる。また、微妙な筆致の差については、毘沙門天と同系統の甲冑を装着している「風天」の筆致差を参考とした。



西明寺本と正覚院本の図像比較

画風の類似性は高く、違いは文様と色彩ぐらいである。現存真長寺本がことごとく西明寺本・正覚院本と図様が一致していることから見ても、真長寺本「毘沙門天」の図像が左図図様のものと考えてはば間違いはない。

「風天」での筆致比較

「風天」に限った事ではないが現存真長寺本と西明寺本では線描きの風合いに若干の違いが認められる。真長寺本の筆者は形態をゆるやかに捉える傾向にあり、西明寺本はより正確に細部を描き込んでいる。



真長寺本



西明寺本

4. 「風天」の部分比較

部分を詳細に比較すると、真長寺本の線描は若干瘦肥が強く、打ち込みも強いことが判る。また、腰布の翻り方の角度に差が認められる



腰布甲冑 (真長寺)



腰布甲冑 (西明寺)



腰布甲冑 (真長寺)



腰布甲冑 (西明寺)



煽られる条帛 (真長寺)



煽られる条帛 (西明寺)



手甲 (真長寺)



手甲 (西明寺)



亀甲文 (真長寺)



亀甲文 (西明寺)



腰布 (真長寺)



腰布 (西明寺)



腹部甲冑 (真長寺)



腹部甲冑 (西明寺)

5. 「毘沙門天」白描復元



※ 阪野智啓 制作（平成 20 年）

白描復元について

以上の考察から、西明寺本を下敷きにし、筆致をなるべく真長寺本「風天」に沿うように描画した。ただ、文様と台座に関しては、類似本の全てにおいて一致するものがなく、復元を保留とした。

また、腰布の形態については縮小図にて別図様も推測してみた。



（腰布別図様）



（白描部分）

【使用材料】 ダイヤマツトスーパー200
松煙墨（蒼松萬古）